
ウサギが導くあの夏の日

ゴリヴォーグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウサギが導くあの夏の日

【Nコード】

N1158V

【作者名】

ゴリヴォーグ

【あらすじ】

「誰にでもやり直したい過去ってあると思うんや。大学受験やったり、プロポーズやったり。けど夏祭りの日、うちが会った青年はちょっと違っとった。バイバイ、その一言を言うために」
ウサギのお面が導く、少し不思議な物語。言っとくけど、ファンタジーやないで。

大久保唯様主催、企画【夏色屋台】参加作品。

(前書き)

大久保唯様主催、【夏色屋台】参加作品です。テーマはお面屋と言
つときながらお面屋要素があまりない気がする……。

「なんで1人で来てるんだろうな、俺……」

周りを見ると、家族連れにカップル達。中坊ですら友達と来ると言うのに、俺という人間はどうしてソロで来るかね……。恋人どころか、そもそもここに友達がいらない自分が悲しくなる。

正確に言くと、友達はいないことはない。ただみんなこの町にいないんだ。俺は地方の大学に入学し1人暮らしを始めた。心躍るキャンパスライフを夢見たのはいいものの、現実是非常であり、まずは友達100人作ろうと入会したテニスサークルでは、テニス初心者、いやそもそも運動音痴ということもあり、周りと上手くかわることができず、何よりサークル特有の雰囲気は一切合わなくて直ぐに退会したのだった。そんなの入会する前に気づけよと2年前の自分に突っ込みたいところだ。退会した後のキャンパスライフは薔薇色なんてものではなく、濁りに濁った曇天のような灰色キャンパスライフだった。勉強に集中する余り、周りと話すことがなくなり、結局テスト前だけだからという期間限定ヒーローの座についてしまった。誠に不愉快だ。そんなこんなで俺には友人と呼べる人間がこの町にはおらず、今日の夏祭りを1人で行くという、ある意味どんなクエストよりも難しいクエストをしているのだ。行かなきゃいいじゃないと思うかもしれない、でも部屋に閉じこもっても聞こえる祭囃子、活気あふれる笑い声、一度気にしだしたら後はもう止まらなかつた。

「これでも遊園地に1人で行くよりはマシだ……。負けるな、俺」
自分でも誰と戦ってるのか分からない。強いて言くと、この世界そのものかな。なんて厨二病上等なことを考えてると、

「ん？」

いろんな屋台をみて回っていたが、すれ違った子供がハッ　リ君
という忍者のお面をしていることに気付く。

「ケ〜ンジくん、遊びましょう。だっけか？」

何年か前にやっていた漫画原作の映画を思い出す。一応一通り見たけど、結局何がしたいのか分からなかったというのが感想だ。だからといって、自分の方がもつと面白いものを作れるとは思えない。あれはあれで最善を尽くしたのだろう。それについていけない俺が悪いのだ。

「行ってみるかね」

打ち上がる花火の音と、自然と踊りたくなるような祭り囃子をBGMに、自分もお面を買おうとお面屋を探す。童心に帰るのも悪くないさ、少なくとも今日はね。

「おっ！ 来よつた来よつた！ 色々揃つとるでー！」

さて、お祭りのお面屋さんというのは、なんだかんだ言いつつも3分以上頑張ってる光の巨人や、ネズミが嫌いな青猫型ロボットとか喋るトナカイといったナウなヤング、いやお子様に人気のキャラクターのお面が売られていたはずだ。マーケティングの結果、子供受けする物売るのが定石ではなかるうか？ 少なくとも、俺の20年弱の人生において、若本ボイスの狂戦士とか、若本ボイスの不平等皇帝のお面を売っているお店は見たことない。

「なんや、買わへんのかいな？ 冷やかしなら帰ってやー」

耳に心地いい関西弁。イントネーションの自然さを考えたら、生粋の関西人の姉ちゃんなんだろう。

「いや、ここお面屋ですよね……？」

「ん？ 兄ちゃんおもしろいこと言うなあ。うちの店見て金魚掬いに見えるか？」

それは無理がある。水槽もなければ金魚もいない。有るのは、

「どや？ 一つ一つ職人のオーダーメイドやで！」

どう考えても、憧れのヒーローヒロインのそれではなくて、なんつうか凶々しく、ワールドワイドなものなんだ。

「あのー、なんすか、これ？ トーテムポールみたいな顔してますけど」

まず目に付いたのは、世界の果ての民族がお祭りに使いそうなお面。間の抜けたトーテムポールの顔は何も語らず、情緒溢れる夏祭りにおいて異質な存在だ。例えるなら、フルオーケストラに1人ハーマニカが混じってる、そんな違和感が。

「おつ、兄ちゃんお目が高いなあ！ これはアマゾンの奥深くのさらに奥深く、ジョーンズ教授も鞭を置いて逃げ出すぐらいの未開地のペラペラ族の儀式用仮面や！ レプリカとかやなくてモノホンやで！ それとトーテムポールって言うんは実は北アメリカのものから、兄ちゃんの例えはちとちやうかなあ」

頼んでもいないのに、トーテムポールに関するトリビアを教えてください。また一つ賢くなった。トーテムポール博士と呼ばれるのも時間の問題……、うん、冷静に考えなくてもあまり嬉しくないな。

トーテムポールに特化した知識ってどーよ。
「何でそんなの持ってるんですか……」

今度は冷静に考えてみる。インディも逃げる場所なら、なんでそんな秘境の民のお面なんか持ってるんだ？

「なんでって……、交渉したに決まっとるやん。いやー、あん時は本気で死ぬかと思たわあ！ ペラペラ族に取って握手は宣戦布告やつたからなあ。海外行くときはな、勉強しとくもんやで。氣いつけやー」

うんうんと頷く店主さん。もしかしてこの人滅茶苦茶凄い人なんじゃ……。

「ちなみに、このお面は気に入らない相手を呪い殺すことが出来るんやて」

あつはつはと笑いながらとんでもないことを言いはる。

「そんなもの売るなああ！」

「はっはっ、冗談やて。凶々しい見た目やけど、立派な祝い事に使われるねんで」

どちらにしても縁日に売るもんじゃないだろ。

「あれ？ 気に入らんかった？ そんなじゃこれとかどうや？ 結構有名な奴やし、人気の一品やで」

お姉さんはそう言うのと、ごそそとカバンを探る。

「品切れちこうて隠しとったんやけど、君なら似合うやろー」

夜空に咲く大輪の花火。その光に映された、ファントムマスク。

「オペラ座ああああ！？」

頭の中で流れるあの音楽、逃げ惑う観衆、空気を読まないマスクメン。

「ピンポン。ファントムマスクやでー。これをつけたらパーティーでも人気者間違いなしや」

「だろうけど！ 悪目立ちするよね！？」

穢れなき真っ白なマスク、それに隠すのは……。なんなんでしょうね？

「じゃあないやんか。けどこの時代はマスカレードゆうて仮面武道会が頻繁に行われとったんやで」

マスカレード、ねえ。

「なんだろ、合ってるけどどこか大きく間違ってる気がする」

天下一舞踏会、みたいな感じでさ。

「知らへんのか？ マスカレード。毎年クリスマスに暇をもてあました貴族たちによって奴隷達が戦うんや。全く、悪趣味やと思わんか？」

「貴族なら仕方ないね」

さっきワンピース読んだばかりだもん。にしても貴族ってのを安易な悪役にしたがるよね、あの作者。

「ふーん、これもあかんか……、ほんならこれは？」

お面屋の姉ちゃんは、再びごそごそとカバンを探りだす。

「じゃーん！！ これは今回の掘り出しもんやあ！！」

姉ちゃんを取り出したのは、白く片方の耳が折れているウサギのお面。なんかで見たこと有るようなウサギだな。なんで見たんだっけ？

「兄ちゃんはSFとか好きなくち？」

SF？ 急に話題が変わったな。さっきまでオペラ座の怪人だったのに。ってそれも夏祭りでする話題じゃないけどさ。

「まあ、程々には」

といつてもスターウォーズとかぐらいしか知らんぞ。

「まあこれはそんなSFチックな体験ができるというトンでもなお面やねん。言っとくけど、こいつはこれまでのもんとは格段に凄い。ダンチャ」

「ど、どういうことですか？」

姉ちゃんの雰囲気気圧されてしまう。さっきまでのちゃらけた物じゃない、このお面に何が隠されてるというんだ？

「不思議の国のアリスって知つとるやろ？」

SFじゃなくね？ しかしまた懐かしいなあ、子供のころに読んだことがある。そういや知り合いにアリスシリーズが好きだった子がいたっけか。内容はなんか色々理不尽だった気がするけど。粗筋としては、白兔を追ったアリスは……、

「このお面ホワイトラビット？」

妙な既視感の正体がわかった。あの絵本のウサギにそっくりなんだ。

「そゆこと。それならタダのお面やねんけど、さっき言ったようにちーとばかり面白ギミックが有るんよね」

姉ちゃんはすう、と息を吸って、

「時を越えちゃうんや。そんなトンでも効用が有るんやって」

そう、笑いながら答えた。

「はあ、結局買ったんだよな、これ」

家に帰って少し後悔する。時を越えるお面、それが本当かどうかは別として、あの時の俺は本当にどうかしていた。冷静に考えてみたら、タイムスリップだなんて不可能って何年も前から言われているし、車だってまだ空を飛ばないんだ。過去に戻る、未来に行くなんていうのは、仮に出来るとしても、それまでに俺たちは何回転生すればいいのだろうか。22世紀には無理だろう。藤子先生、ドンマイ。

「っーかどうすりゃいいんだ？ これ」

しかし何を血迷ったのか、そんな胡散臭いことこの上ない一品を買ってしまったのだ。

『まいどありー！！ 諭吉や諭吉！！』

しかも諭吉と引き換えに。縁日の価格ですらもっともっと良心的だ。300円ではずれくじ引く方がまだマシってのも珍しい。苦学生には辛い選択だ。

それでも、不思議と俺はそれに手を出していた。

『一度だけやで？ やり直したい時に戻ることが出来るらしいんよね。うちかてやったことないか分からへんけどね』

「高い教科書代と思うべきかな？」

口ではそんなことを言いながらも、内心ではあることを思い返していた。

戻りたい過去

それは10年も前のこと。小学生のころ、地元の夏祭りで、俺は

約束を破ってしまった。それは子供のころのちよつとした約束だ。タダの口約束、その程度のものだ。でももし、あの時彼女にさよならを告げることが出来たら。

「あああ！ 今日の俺は、どうかしているんだ！！」

白兔のお面が、妙にいやらしく笑った、そんな気がした。

「って言うてはみたものの、何をすりゃいいんだ？」

ウサギは答えない。ただのお面のようだ。

「装着して念じる、ってどこかねえ？」

それ以外に思いつかなかった。お面という媒体の性質上、被るという選択肢しかないと思う。流石にこれを燃やしてその煙を吸うとか、部屋に飾つとくだけつてのはないだろう。

「いざ行かん！ やり直したいあの日へ！！」
なんて格好つけてみる。

「……」

すると時間が……、なんてことはなく、部屋は静まり返ったまま。そりゃそうだ、住んでいるのは俺だけだもん。

「ですよね！。なんであんなあからさまな詐欺に引つかかるかねえ、俺という人間は。恥ずかしくて警察にもいけないや」

悪態をつきながら（99%自業自得だけど）お面をはずそうとする。だけど、

「あり？ 外れない」

接着剤が顔についたように、外れようとしな。しかもゴム紐がしまつていく。例えるなら、万力。

「ちよつと、なんだつての！！ 呪いのお面か！？」

外そうとしても一向に外れる気配がない。というよりも顔の一部になりつつある。

「いてて……、いい加減に、外れる！」

うんとこしょ、どっこいしょ、それでもお面は外れません。

「あああああ！ つしょ！」

プチン！ とゴムが切れる音がする。

「はあ、はあ、なんでお面剥がすのにこんな苦労しなきゃならないんだ……」

ここまで激しい運動になるとは。恐ろしいかな、お面。

「ん？　なんか変だぞ？」

こんなだぼだぼな服着てたっけ？　というより、

「声おかしくね？」

自分の声が他人にどう聞こえてるかは分からないけど、なんとなくか、違和感を感じる。なんというか声変わり前というか……。

「まさか、そんなアポトシキンのな、ねえ……」

と思つてたのは鏡を見るまで。

「バーロー」

ウサギのお面を被り身の丈に合わない服を来たガキそこに写っていた。

「話が追いつかないんだけど」

冷静に考えるんだ。思考が停止した時、それは死を意味する。

「っ……かここ家じゃないよな」

正確には下宿先じゃない、と言うべきだろうか。これはまるで、

「……実家やん」

あの人は今に出るようなアイドルのポスター、物置と化した勉強机、雑に置かれた漫画、日めくりカレンダー、10年前に戻ったかのような。

「夢……じゃないよな、どうせ」

無理に頬をつねる必要もあるまい。受け入れるのがいいだろう、本当に時間が遡つたということに。なんせ鏡の俺は、第二次成長期前の俺。身長が10cm（目測）ぐらいの差がある。やり直したいあ

の日に戻ったというように……。

「ごうなりや、やるしかないよな」

そう決意を固めると、俺は、ゲームを買ったためにためていた貯金から1000円札を二枚抜き取り、

「母さん！ お祭り行って来るね！」

子供らしく元気いっぱいその旨を告げる。って現在子供なんだけどな。

「行ってらっしゃい。ん？ 母さん？ いつもママって呼んでたのに、どっという心境の変化かしら？」

母が何か言ってた気がするけど、耳に届くことはなかった。

本当なら、今日俺は祭りに行かなかった。理由は今思うと本当にしょうもない、ただ気恥ずかしかったから。それだけだった。

10年前、学校のプールが解放された日のこと。

「ねえ、今日お祭りに行かない？」

『誰と？』

『私と！ そんじゃ、待ってるから！ 午後6時に神社の鳥居で！』

『おいっ！ 行っちゃった……』

『なんだなんだ、デートかあ？』

『コンピューター……！』

『バツ、うっせーな……！ そんなんじゃねえぞ……！』

『おい、皆で見に行こうぜ！！』

『や、やめる！！』

結論だけを話すと、俺は皆に嘸し立てられるのが嫌で、祭りに行かなかつたし、残りのバケーションは忌々しい宿題に費やした。でも、これから二学期が始まるって言う始業式の日、彼女はいなかつた。そして、

『今日は皆に残念なお知らせがある。このような形になってしまい本当にすまないが、
は転校した。』

意図的にだろつか、それとも先生自身がそうなのか分からないけど、機械的にそれは告げられた。そしてその時俺は気付いたんだ、彼女はこの街での最後の思い出が欲しかったんだと。そのパートナ―に俺を選んでくれたこと。そして俺はその期待を裏切ってしまったことに。

『その、ゴメン。悪かつた』

嘸し立ててた連中も謝りに来た。違うんだよ、そうじゃないんだよ。

『あいつ祭りが終わってもずっと待ってた、俺たちが冷やかしてもお前が来るって行って聞かなかつた』

子供ながらに彼らも責任を感じたようだ。まだ責任なんて言葉の意味もちゃんと分かってないような年なのにな。それから彼女がどうなつたかは知らない。もしかしたら、もう結婚して子供がいるかもしれないし、考えたくないけど何らかの理由でこの世にいないかもしれない。誰もが羨む一流大に入学したかもしれないし、ホステスで夜の仕事をしているかもしれない。もう俺と彼女は友人でもな

んでもない、赤の他人だ。別にそれを引つ張ってるわけでもない。彼女からの好意には気付いてなかったといえは嘘になるし、むしろ自惚れていたぐらいだ。だからといって俺が彼女を好きになるというのは別問題、こう言うど何様と思われるかもしれないけど、俺は彼女のことをただ仲がいい友達としか見れなかった。良くて腐れ縁、それは突然の別れから10年経った今でも、そう思い続けている。彼女と付き合い、結婚し家庭を築くというビジョンも浮かばないし、再び会ったとしても、またあの頃のように仲良くなることはないだろう。理屈じゃなくて、直感でそう感じる。

でも一言最後に言いたかった。「サヨナラ」でも「元気でな」でも何でもいい。自己満足にすぎなくても、キチンと彼女に別れを告げたかった。

だから俺は戻ったのだろう。彼女と別れるこの日に。よりによってこの日かよ、自分でも笑える。やり直したい時なんて腐るほどあるだろ、大学受験にサークルも最初から身の丈にあつたところに入っていたらばもっと青春出来ただろうに。今更だけどさ。

我が家から自転車で5分ほど。山の方へ登ると地元で一番大きな神社がある。といつても、ローカルな範囲で大きなだけで、日本中見渡すと大したことない。下宿先のお祭りのほうがまだ大きいし、花火も上がらない。所詮は厄神さんだ。

「あつ、来てくれたんだ、」

鳥居の向こうから祭囃子が聞こえる。スピーカーから鳴らしているのだろうか、時々音が割れている。小さな頃に気付かなかったことに思いを馳せつつ、自転車を適当なところに停めると、彼女のほうから声をかけてきた。

「まーな」

ぶつきらばうに返す。そういやこんな顔だっけか。写真なんてなかったから記憶があやふやだったけど、今思うと可愛らしい子だ。歳をとるにつれて美人になっていく、そんな気がした。

「、なに付けてんの？ 似合ってないよ？」

噴出すのを堪えながら言う彼女。なんか付いてるのか？

「付いてるも何も、ウサギのお面だなんて、らしくないよ。可愛い」

っていつの間に！？ ゴムが切れて……、戻ってるし。なんなんだ、コイツは。内心あせったけど、不自然にならないように、

「うるせーよ」

子供らしい言葉遣いは出来ているのだろうか？ いや、いつもの発言が子供っぽいかもしれないな。

「行こ！ 後ろから見てるあいつらはほっといてさ！」

言われて後ろを見ると、草木の中にクラス男子たちが隠れていた。スネークのつもりか？ ダンボール使えばいいのに。

「ほら！ ぼさっとしてない！！」

そう彼女に手を引かれ、熱気ある祭りの場に連れて行かれた。

そういや、女子と二人で遊ぶって始めてかも。三次で。

「はー、食った食った」

「女の子がそう言うこと言うなよ。下品だぞ」

彼女とまわった祭りは、実に楽しかった。それなりに仲が良かったと思っていたが、今まで知らなかった彼女を垣間見ることが出来た。ベビーカーがステラが好きで、イカ焼きは嫌い。煎餅にメイドさんも驚くようなクオリティのズゴックを描いて、かき氷を一気に食べて頭を抱える。何故か射的が得意でどうにもくじ運が妙にない。金魚すくいもポイを必要以上に深く沈めてスグ破るし、ヨーヨー掬い

も釣り針でヨーヨーを割るというミラクルを起こす。そのくせ負けず嫌いでなかなか学習しない。やけになるとまたベビーカステラを買う。全て俺が初めて見る彼女の一面だ。

「どーせ私は下品ですよーだ」

ベーと舌を出し悪戯に言う彼女。

「どーする？ 結構周ったと思うけど？」

リンゴ飴、カタ抜き、箸巻き、唐揚げ、お金が許す限り遊びまわったし食べ歩いた。今日は晩御飯がいらないうらいに。道中オボロム掬いとやらがあっただけど、あれは何のことだったんだらうか？ じゃじゃ馬姫はあまり関心を示さなかつたみたいだけども。

「あー！ 倒れねえぞ！ 重り置いてるんじゃないの！？」

スネークたちはこっちへの関心が薄れ、射的を楽しんでいた。まっ、子供ってそう言うもんだよな。

「んー？ そだねー。折角だから私もそのお面買おうかな？」

売ってんのか？ このウサギ。

「おー、いらっしやいらっしやい！ 昭和のヒーローから子供たちの人気者まで色々そろつとるでー！ おっ、嬢ちゃんらデートかいな？ お揃いのお面とかどうやー？」

は？ どゆこと？

「なんであんたが！？」

「なんであのお面屋がいるんだよ！？」

「ん？ 坊主うちの知り合いか？ 初めて見る顔やけどなあ、あと年上にアンタって言ったあかんで！ うちやから許すけど、他の人ならしばかれるとこやでー。気をつけやあ。うちの娘も高校入ってからいきなり珍走団ぶち壊して警察の世話になるし、お姉さんは悲しいわあ！ 若人のモラルの低下が悲しいわあ！ まっ、なんか買ってくんやったら特別に不問にしたらうやないか！ なんって優し

くて美人なんやろなあうちは！」

「どうやらこのウサギのお面を売ったお面屋とは別人らしいが、テンションといい見てくれといい喋り方といいあの人に瓜二つだ。」

「すみません、ここにあるお面が全部？」

「彼女はお面のラインナップを一通り見て尋ねる。あの人はへんてこなお面ばっかだったけど、この人は割と普通の感性を持っているのか、愛と勇気だけが友達の戸田恵子や、月に変わってお仕置きしてくださるあの人のお面といった定番物を置いている。ただ、昭和のヒーローという言葉に偽りはなく、黄金で無敵なあの人や、三木道山みたいな名前のプロレスラーを模ったお面があった。こんなの買うのはおっちゃんぐらいだろうに。」

「いや、まだあるけど。なんや、このラインナップに不満か？」

「そーゆーわけじゃないけど、コイツと同じウサギが欲しいの」「俺がかけているウサギのお面を指す。」

「坊主、それどこで見つけたんや？ この世に2つしかあらへんのに……。アイツがあげたんか？ まあええわ、買ってくれる人がおるんならお面も本望やろ。んとこれやな。お嬢ちゃんが欲しいんはこれか？」

「かばんからウサギのお面を出す。全く同じのが出てくるかと思っただが、色は対照的に黒かった。」

「えー、白いのがいいなあ」

「悪いな、白いんは坊主が持つてるからもうないんや。黒いのももけっこーレアやで？」

「にししと笑うお面屋さん。」

「まっ、いつか。なんかセットで夫婦みたいだし。そう思わない？」「子供ならここで」

『ばっ、ちげーよ！！』

「的な感じになるんだろうけど、俺は見た目は子供、頭脳は大人の」

大学生。ここは1つクールに返してやるかね。

「、結婚しよう」

今までにないイケメンボイス&ドヤ顔のコンビ。これで墮ちない女性は……。

「ふえ？ なに言ってるの、あんた」

うん、恋愛経験三次0じゃこの程度だよな。普通にリターンされました。

「まいどありー！」

「どう？ 似合う？」

黒ウサギのお面をかぶり、オーディションを受けているアイドルみたいにアピールしてくる。ただ間の抜けたウサギの顔が妙におかしくて、

「お面に似合うも似合わないもあるのか？ ま、間抜けな顔ってとこは似合うかも」

「つつい意地悪を言ってしまう。」

「もう！ 面白くないな！。変に大人ぶっちゃって」

ぶーたれる彼女。それは大人になったってことなんでしょうかね？
「悪かったな」

「まあ、お祭りは楽しかったけどね。あんたと回れて良かった。ありがと」

今日は彼女の色々な顔を見てきた。楽しそうに笑う彼女、悔しそうにする彼女、おいしそうに食べる彼女。でも寂しそうな彼女は初めて見た。

「あのさ、私アンタに言わなきゃいけないことがあるんだ」
それは。

「黙ってたんだけど、私転校するんだ。ここよりもずっと遠い場所

に」

「……」

俺は何も言えず、彼女の言葉に耳を傾ける。

「あれ？ 思ったより反応薄いなあ。もちつと取り乱してくれてもいいのに」

事前情報がある分、冷静に聞くことが出来た。頼む、転校しないでくれ！ というのもキャラじゃないし、言ったところで何も変わらない。でも、変わらないものは他にもある。

「一生のお別れになるわけじゃない、だろ？」

「ふふつ、そうかもね。ねえ」

「なんだ？」

「私たち、ずっと友達だよ？」

「ああ、離れていてもな」

「忘れたら承知しないんだからね！　、」

「バイバイ」

「バイバイ」

黒ウサギと白ウサギは手を振り、それぞれの帰る場所へ。ある歌手は言った、さよならは別れの言葉じゃなくて、また会う時のための約束。また会う日まで。

「チキンやなあ、自分。ここはかつこよく唇奪うんが男ってもんや
る！」

「だって俺恋愛感情持ってませんもん。若気の至りとは言え、好き
じゃない人とキスをするのは相手にも失礼です」

二次元ではやりたい放題しているけどね！！

あの日、眠りに付いた俺は、気が付くと元に戻っていた。配置も
何も変わらず、同居人もいない、変わらない日常に。携帯電話を見
てもどこにも彼女の名前は無く、再会したという記憶が植え付けら
れたわけでもない。まるで全部夢だったかのよう。

彼女に再会したのは、帰省したときのお祭りだった。なんとなく
覗いたお面屋に、やはり彼女はいた。

こちらに気付くと、何でいるんだって顔をしたが、これまでの経緯
を話すと、何故かほっとしたような顔をした。

曰く、

「いやー、ほんまもんやってんな、あれ。1万円ぼったくったつた
と思っただけど、そんな効力あるならもつとぶっかけたらよかったな
あ」

と、思いつきり俺は騙されてたみたいだった。しかし、1日だけ
とはいえ過去に戻ったのは事実だ。祭りの熱気、楽しそうなみんな、
あんな活き活きした夢があつてたまるか。

「なんや、お堅いやつちやなあ。じゃあなんで戻ったんや？」
心底不思議そうな顔をする。

「強いて言うなら、せめてバイバイは言っておきたかったし彼女の
期待に応えたかったから、それだけです」

自分でもどうかしてるって分かった上でやったからさ。後悔は無
い。

「ふーん、そういうもんなんかね？ まあ、なんでもえーけど。それよりも黒ウサギや。話聞く限りじゃ白ウサギみたいになんらかのパワーがあるわけでもなさそうやし、結局なんなんやろな、コイツ」
白ウサギのお面を叩きながら言う。叩いても何にも無いことは一応こっちでも確認したんだけどね。

「おかあちゃんもよう分からんの作ったなあ。仮面つてのは付けた人の顔を隠すことから、人格が変わったり超人的な力を得たりするのはまだ分かるけど、時間跳躍とかなあ。これはうちが生きとる間には解明されへん謎やろな」

1人で納得して頷く姉ちゃん。確かに理由も原因も分からないけど、このお面で過去にとんだ。それだけで十分だと思う。

「しっかし普通惚れへんか？ 来るのを待ってたりお祭りを一緒に楽しんで新しい一面見たんやろ？ 最後の思い出のパートナーに選ばれてんから、脈ありやんか」
さつきよりも解せないっていったような顔をする。

「わあ！ お面屋さんだあ！ 見て！ あのママと同じウサギさんのお面つけてるよ！」

「あら、本当ね。お揃いかしら？」

「おいおい、パパ妬いちゃうぞー。あつ、たこ焼きが売ってるぞー」

「わーい！ 私たこ焼き大好き！！ 行こっ！」

子供に引つ張られながらも、仲良く三人で手をつなぎ合う家族。母親だろうか、彼女の顔にはいつかの黒ウサギのお面が相も変わらず間抜けな顔で笑っていた。

「黒ウサギって、あーあ、振られとるやん。おっしいなあ、もしかしたらアンタがあそこにおったかもしれへんねんで。ってあの子アంతと同じ年やから……、うわっ、何歳で子供産んだんや……。若

人のモラルの低下やあ……」

似たような言葉を似たような人から聞いた気がする。

「あっ」

一瞬彼女と目が合った。そこから何か発展するでも、背徳の関係が生まれるでもなく、互いに笑いあうだけ。直ぐにたこ焼き屋の方へ顔を向けた。

「幸せそうだな、アイツ」

「なんや、リアクション薄いなあ。弄りがいが無いやんか。で、ホントは後悔しとんちゃうの？」

「どうやどうやとにじり寄ってくる。」

「ありませんよ、後悔なんて」

「その心は？」

「ヒュー、ドーン！ 10年前には無かった花火が打ち上がった。」

「だって俺年上好きですもん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1158v/>

ウサギが導くあの夏の日

2011年7月25日03時17分発行